

## プラジュニャーカラグプタの苦諦論(2)

——*Pramāṇavārttikālaṅkāra ad Pramāṇavārttika* II 150-159 和訳研究——

護 山 真 也

### はじめに

ダルマキールティは『認識論評釈』(*Pramāṇavārttika*)の「プラマーナの確立」章(*Pramāṇasiddhi*, 以下 PV II と略す)第146偈後半から178偈まで、全285偈から成る同章の実に32偈半を費やして苦諦の解説を行っている。

通常、苦諦の解説と言えば、四苦八苦(生老病死の四苦・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五取蘊苦)や三苦(苦苦・壊苦・行苦)の説明が想起されるが、ダルマキールティの解説にはそれらの説明は登場しない。

彼が集中的に論じるのは、「輪廻する五蘊は苦である」というテーゼと対立する対論者説の論駁の詳細である。仏教徒の見解によれば、過去世において繰り返し同種の欲望や怒りなどの煩惱が生じてきたことで、欲望などが熾烈になっていくために、あらゆる生き物は苦から逃れることができない。これに対して対論者の側は、欲望などが発生する原因は心にあるのではなく、身体を構成する三要素、すなわち、欲望の原因となるカパ(胆汁素)、怒りの原因となるピッタ(粘液素)、愚かさの原因となるヴァータ(体風素)にあると説く。また、別の対論者は欲望などは地・水・火・風という四元素の属性であるという見解を述べて、仏教説に対抗する。ダルマキールティはこのような対論者との議論を通して、欲望などの発生を説明づける因果論を明確にしている。最後に、いわゆる四諦十六行相の説に立ち返り、苦の四相に関する自説をまとめて苦諦の考察を締めくくる。

#### < PV II 146cd-178 の構成 >

苦諦のテーゼ (146cd-147ab)

欲望などは三種の体内要素の属性であるとする説の否定 (147cd-157)

欲望などは四元素の属性であるとする説の否定 (158-175)

苦諦の四行相 (176-178)

### 対論者をめぐる考察

先述の通り、この箇所におけるダルマキールティの対論者は大きく二種類に分けられる。一方では、ヴァータなどの三要素から欲望などが生じるとする説が登場し、他方では、地・水・火・風の四元素から欲望が生じるとする説が検討される。一見すると、いずれの対論者も唯物論(Lokāyata/Cārvāka)の立場に関連するように思われるが、はたしてそれは正しいだろうか。

インドの唯物論思想について詳細を論じた生井智紹『輪廻の論証—仏教論理学派による唯物論批判』（生井 1996: 16-52）を参考にすれば、唯物論者の主張は次の七点にまとめられる。

- (1) 知覚のみが正しい認識の手段である (pratyakṣaikaḥpramāṇavāda)
- (2) 四元素のみが真実在である (bhūtamātravāda)
- (3) 精神的なものは四元素から生じる (bhūtacaitanyavāda)
- (4) 世界の多様性は本性的なものである (svabhāvavāda)
- (5) アートマンとは身体のことである (dehātmavāda)
- (6) 他世は存在しない (paralokāpavāda)
- (7) 人生の目的は快樂にある (kāmarthavāda)

上記のうち、(4)については再考の余地があるが、今はその点には立ち入らない。ここでは、ダルマキールティの苦諦論との関連で登場する対論者説のうち、欲望などは四元素の属性であるとする見解は、(2)(3)の論点を受けていることが明らかであるが、欲望などがヴァータなどの体内要素の属性であるという説はこのリストには見当たらないという点が重要である。

この点に関して、エリ・フランコ博士 (Eli Franco) は *Dharmakīrti on Compassion and Rebirth* (Franco 2021: 135-139) において、ヴァータなどの体内要素から欲望などが生じるという説を唯物論者に帰することに慎重であるべきとの見解を表明している。例えば、ジャイナ教のマラヤギリ (Malayagiri, 10-11 世紀頃) の『ナンディ・アディヤヤナ註』 (*Nandyadhyanatīkā*) には、唯物論者 (Bārhaspatya) のなかに身体の三要素を欲望などの原因とする説を保持していたことを示す断片 (NAT 32b1-2) が見られるものの、詳細にその記述を分析すれば、それがプラジュニャーカラグプタの記述 (PVA 120,22-23) を下敷きに行っていることが判明する、とフランコ博士は指摘する。では、そのプラジュニャーカラグプタが三要素を説く唯物論者の見解を知っており、それを引用したという可能性はないのか。フランコ博士は次のように述べる。

It seems that Prajñākaragupta, too, is not familiar with any Lokāyata source on the humours, but paraphrases what Kamalaśīla says in TSP 668.24-25: *kecid āhuḥ—śleṣmaṇaḥ sakāśād rāgaḥ, pittād dveṣo vātān moha iti*. I have not been able to trace the source of this statement, and it is indeed a pity that Kamalaśīla does not identify it. Unfortunately, we do not have a clear criterion to distinguish between genuine fragments and paraphrases and bogus or phantom materials. The present case of humours illustrates clearly how precarious our assumptions about the Lokāyata are. (Franco 2021: 138)

身体の三要素と欲望などを結びつける学説に関して、ダルマキールティの注釈者たちの誰もその典拠を明確にする者がいないという事実から、フランコ博士はこの学説を唯物論者のものとするを保留する。

この点に関して、すでに前稿（護山 2021: 61, fn. 57）で指摘した通り、ヤマーリが PVA II v. 647 への註釈箇所（Y D180b4, P205b3）で「唯物論者」（tshu rol mdzes pa, \*Cārvāka）という語を使用していることは注意しておきたい。また、現在ヤマーリ註の梵文テキスト校訂を進めておられる松岡寛子博士の資料によれば、ヤマーリはこの対論者を紹介するために幾つかの引用を行っている。近い将来、校訂テキストが公刊された段階でこの対論者をめぐる問題については再考されるべきである。

今は、プラジュニャーカラグプタの記述のみから知られる対論者説の特徴をまとめておく。

- A. 身体の三要素と欲望などとの関係：ヴァータ（体風素）から愚かさ（moha）が、ピッタ（胆汁素）から怒り（dveṣa）が、カパ（粘液素）から欲望（rāga）が生まれる。
- B. 体内要素が混じり合うことから欲望などが生じる。
- C. 体内要素には特殊な変容（pariṇativiśeṣa）が生じる。その変容は、結果から推理されるものである。この特殊な変容に基づいて欲望などが発生することもある。
- D. 体内要素は均衡しているときと、不均衡なときとがある。例えば、均衡状態のときには精液が増え、その結果として欲望が生じるが、不均衡状態のときにはそうはならない。
- E. 体内要素の他に、外的対象の特質（ex. 欲望の対象となる人物の容姿や振る舞いなど）もまた欲望などの発生の協働因となる。

このうち、A 説が基本になる学説であるが、実際には体内要素と欲望・怒り・愚かさの発生とは一対一対応ではない。逸脱する事例を説明するために、B～E の説が出される。しかしながら、必然的な制約（niyama）に基づく厳密な因果関係の観点からは、いずれの説明も十分なものとは見なされないことがダルマキールティとプラジュニャーカラグプタにより明らかにされる。

\*\*\*

以下の和訳研究は前稿（護山 2021）からの続きであり、凡例や参考文献等はそちらを参照していただきたい。和訳研究の後に補遺（Appendices）として、護山 2021 から本稿までの範囲の科文（Synopsis）と本稿が扱った範囲における校訂テキスト（S）の訂正表を加える。本研究は、松岡寛子（オーストリア科学アカデミー研究員）、三代舞（日本学術振興会特別研究員）の両氏と定期的で開催している研究会の成果を反映したものである。研究会にて貴重なご意見をいただいたお二人に心より感謝申し上げます。なお、本研究は JSPS 科研費 22H00605 の助成を受けたものである。

\*\*\*

## 和訳研究

## 1.2.3 要素の変化に応じて欲望などが変化するわけではない

## 1.2.3.1 ダルマキールティの議論 (PV II 150-151)

[S122,4; Ms53a2]

《また、〔ヴァータ・カパ・ピッタという三つの体内要素（ドーシャ, *doṣa*）は欲望などの原因ではない。なぜならば〕体内要素が変化しても〔欲望などは〕変化しないからである<sup>1</sup>。〔〔その論拠は〕不成立〔因〕(*asiddha*)である〕〔という反論は〕正しくない。〔特定の体内要素からではなく、〕いずれの〔体内要素の〕変化に応じても〔欲望などは〕変化するのだから。また、〔先に148偈で述べた通り、欲望などは〕すべて〔の体内要素の混成〕から生じるのではない。》(PV II 150)

《また、原因が増大しているのに結果が損なわれるということは妥当しない<sup>2</sup>。〔原因の増大に応じて結果も増大するはずである。ピッタなどの増大に応じて〕熱など〔が増大する〕場合がそうであるように。欲望などの変化も〔体内要素を原因とするのではなく、〕業などから生じるのである。》(PV II 151)<sup>3</sup>

## 1.2.3.2 欲望などは要素の変化に応じて変化するわけではない (PV II 150 の解説)

[S 122,8; Ms 53a3]

〔反論：〕〔一般的にはピッタが怒りの原因とされるが、〕それ以外の原因（＝カパ）が存在する場合でも、それとは別の結果（＝怒り）が観察されるのであれば、それ（＝カパ本来の結果<sup>4</sup>）に特殊性（*viśeṣa*）<sup>5</sup>があるのだから、特殊な不可見力（*adr̥ṣṭaviśeṣa*）が〔その原因として〕想定される。

<sup>1</sup> この詩節で言われる「ドーシャ」(*doṣa*)について、ヤマーリは欲望などの心的過失を指すと取るが、ここではヴァータなどの三つの体内要素を指すものと理解する。Cf. Vetter 1990: 57. マノーラタナンディンはこの詩節を導入するために、次のような反論を想定する。〔和訳〕「〔反論：〕以下のような反論があるかもしれない。体内要素（*doṣa*）のみに基づいて欲望などがあるのではなく、それらの特殊な変容に基づいて〔欲望などが生じる〕。例えば、〔体内要素の特殊な変容に基づいて〕諸々の病があるのと同様である。それゆえ、〔体内要素を欲望などの原因として認めたとしても、すべての人が〕同じ欲望をもつことになるわけではない。〔以上の反論に対してダルマキールティはPV II 150を〕説いた」(PVV 63,19-20: *syād etan na doṣamātrād rāgādayo 'pi tu teṣāṃ pariṇāmaviśeṣāt yathā vyādhayaḥ / tato na samarāgādiprasaṅga ity āha ...*)。なお、Vetter (1990: 57, fn. 1) はPV II 38cd (*pariṇāmo yathaikasya syāt sarvasyāviśeṣataḥ*) の参照を促す。

<sup>2</sup> S: *varttamāne* を *vardhamāne* に訂正する。Cf. 木村 (1987: 130)。

<sup>3</sup> 他の翻訳として木村 (1987: 130-131), Vetter (1990: 57-58), Franco (2017: 329-330) がある。

<sup>4</sup> ヤマーリ (D 183a4, P208a7-8) は次のように注釈する。「*anyahetusadbhāve 'pi* とは、『カパが存在していても』〔という意味であり、〕*yadanyakāryasya* とは『怒りが』〔という意味である。〕*tasya* とは『結果に』である。*adr̥ṣṭaviśeṣa* は原因に属するものである。それ（＝特殊な不可見力）が想定される、と述べられている。』(rgyu gzhan yod na ni zhes bya ba bad kan yod na yang 'bras bu gzhan ni zhe sdang ngo || de ni zhes bya ba ni 'bras bu'o || ma mthong ba'i khyad par ni rgyu la brten pa'o || de rtogs pa yin no zhes smras so ||)。なお、この内容はJ (D 317b5-6, P 371a1-2) にほぼ等しい。

〔応答：〕以上の反論に対して次のように答える。〔本来の結果とは〕別の結果があってもよい。それ（＝原因<sup>6</sup>）には何か別の特殊性がある〔と考えばよい〕<sup>7</sup>。しかし、結果が増大するときに、「原因の増大に基づいて結果の増大がある」ことがどうして否定されようか<sup>8</sup>。〔例えば、怒りが増大すれば、それはカパが増大したからだと考えなければならない。だが、それは君たちの考えに反するだろう。〕

〔反論：〕〔カパの増大が原因である。〕その場合にもそれ（＝カパの増大<sup>9</sup>）以外の〔原因の〕特殊性はないからである<sup>10</sup>。

〔応答：〕そうだとすれば、先の特殊性（＝特殊な不可見力）は原因ではなくなるので、どうして〔それに関する〕原因・結果が把握されるだろうか。〔特殊な不可見力と欲望などの増大とのあいだに因果関係はない。〕また、見えるもの（*drśya*, =カパの増大）が「特殊な不可見力」であるというのは理屈にあわない。それゆえ、

《それ（X）の変化に応じて〔他方（Y）の〕変化が把握されるならば<sup>11</sup>, 「〔YがXの結果である〕と把握される。それ（X）に応じて〔Yの〕変化がないとすれば、どうして「〔YがXの結果である〕と把握されるだろうか。〔把握されない。〕」》(652)

〔反論：〕《〔体内要素が変化しても欲望などは〕変化しないからである》(PV II 150a-b1) と言うのは不成立因 (*asiddho hetuḥ*) である<sup>12</sup>。ピッタが増大するとき、その苦しみに苦痛を覚える者には怒りが増大するからである。

〔応答：〕〔その論拠は〕不成立〔因〕ではない。〔ピッタに限らず〕カパなどのあらゆる〔体内要素〕の増大による苦痛により怒りが生じるからである。

〔反論：〕〔そうではない。体内要素の増大があるとしても、〕本性としてあまり怒ることがない人には〔怒りが〕生じることもないだろう。

〔応答：〕ピッタが優勢になる場合も、このこと（＝本性としてあまり怒ることのない人

<sup>5</sup> *viśeṣa* の語に関して、ダルマキールティの PV II 150 では「変化」の意味で捉えられるが、プラジュニャーカラグブタの注釈では主として「特殊性」を意味するものと理解した。そのため、文脈に応じて二種類の訳語を用いる。

<sup>6</sup> ジャヤンタ (D 317b6, P 371a2) およびヤマーリ (D183a5, P 208b1) による。

<sup>7</sup> *bhavatu nāma kāryāntaram, viśeṣo 'nyas tatreṭi* は、チベット語訳 (D 114a6, P 135b1) に対応部分がない。

<sup>8</sup> 「カパの存在&特殊な不可見力→怒りの発生（≠欲望の発生）」まではよいとしても、結果の増大（＝怒りの増大）があるとすれば、その原因にはカパの増大がなければならない。特殊な不可見は、カパから怒りが発生するところまでを説明しても、怒りの増大までも説明づけることはない。

<sup>9</sup> ヤマーリ (D 183a7, P 208b4) による。

<sup>10</sup> S: *viśeṣasyābhāvād* を写本に従い *viśeṣasyābhāvād* と訂正して読む。

<sup>11</sup> S に *tadviśeṣāt* とあるところを *tadviśeṣād* に訂正する。この箇所について、ヤマーリ註サンスクリット語写本の情報 (PVAN<sub>Ms</sub> 168r7) によれば、*tasmāt tadviśeṣād* という別の読みがあり、その場合に二つの第五格は同一基体関係にあると注釈される。これに関連して、PVA の B 写本はこの箇所に奇妙なダングの入れ方がされていることが注意されるべきであろう。Cf. MsB 53a5: *tasmāt tadviśeṣāt / # viśeṣasya / grahaṇe kāryatāgrahaḥ / (# は飾り文字)*。MsB はおそらくここを散文として読もうとしたのではないかと推測される。そして、ヤマーリが与えた情報もこの箇所を散文と読む伝承の存在を示唆するのではないだろうか。

<sup>12</sup> S には *nanu viśeṣād* とあるが、写本に従い、*nanv a viśeṣād* と訂正して読む。

には怒りが生じないこと）は同じであるのだから、〔自らを窮地に追い込むような反論を〕言うべきではない。

〔反論：〕では、〔欲望などは〕全て〔の体内要素の混成〕から生じる。

〔応答：〕それも理に合わない。《また、〔先に148偈で述べた通り、欲望などは〕すべて〔の体内要素の混成〕から生じるのではない》(na ca sarvajā, PV II 150d) と述べられているからである<sup>13</sup>。

### 1.2.3.3 欲望などは潜在印象に基づいて楽などから生じる (PV II 151 の註釈)

[S 122,18; Ms 53b1]

さらにまた、仮に〔体内要素の変化以外に、特殊な不可見力という〕別の特殊性はないのだとしても、〔対論者が言うように〕それ（＝体内要素）の変化に応じて〔欲望などが〕変化することはあるはずがない。むしろ、〔体内要素の変化があるのに、〕どうして結果が損なわれるのか。なぜならば、原因が増大するときに、結果が増大することこそが理に適うのであり、〔結果が〕損なわれることは〔理に適わない〕。そうでなければ、それは原因ではないと説いた通りである。例えば、ピッタが増大するときに熱などが増大するようなものである<sup>14</sup>。

〔反論：〕精力剤 (vṛṣyadravya) を服用すればカパが存在するようになるから、欲望が増大することがまさしく確認されるではないか<sup>15</sup>。

〔応答：〕そうではない。〔時として、カパに由来する〕病気の苦痛のために、〔欲望よりもむしろ〕怒りこそが生じるからである。実に欲望などは楽などから生じるものであり、カパなどから生じるのではない。また、内的な潜在印象 (āntaravāsanā) が覚醒することから、楽は特定の人に特定の仕方認識される。以上より、欲望などは体内要素 (doṣa) に基づかないことが理にかなう。

## 1.2.4 欲望の発生に関する生理学的説明に対する批判

### 1.2.4.1 導入

[S 122,24; Ms 53b3]

〔反論：〕仮にカパ (śleṣman = kapha) が増えたところで欲望はないとしても、それだけのことでこれ（＝カパ）が〔欲望の〕原因ではないことにはならない<sup>16</sup>。〔カパが本来もっている欲望を生む〕能力 (śakti) が〔体内要素の〕不均衡 (vaiṣamya) に由来する苦しみのために妨げられているからである。他の阻害要因 (pratibandha) があるときに X が〔結果

<sup>13</sup> この記述に関連する PV II 148ab (na sarvadharmāḥ sarveṣāṃ samarāgaprasaṅgataḥ) については、護山 2021: 64 を参照。

<sup>14</sup> 例えば、『チャラカ本集』では、マリーチ (Marīci) の発言として、ピッタに含まれる身体中の火が体温の高低をもたらす、という言葉が紹介されている。Cf. CS I.12.11, 矢野 1988: 87.

<sup>15</sup> 校訂本は vṛddhyadravyopayoge であるが、写本に従い vṛṣyadravyopayoge と訂正して読む。Cf. zas bzhun poz na T (D 114b5, P 135b8)。また、写本および校訂本は kaphasadbhāvād の読みであるが、T (D 114b5, P 135b8) bad kan dang 'brel pa las に基づけば、kaphasambandhād が想定されるかもしれない。しかし、今は写本・校訂本に従う。

<sup>16</sup> 校訂本は tāvatā hetur と読むが、tavatāhetur と訂正する。Cf. T (D 114b6-7, P 136a2) : rgyu ma yin pa ni.

を] 生み出さない場合, その X は原因ではない, という事はならない<sup>17</sup>。[同じ考えを適用すれば,] いかなるものも原因ではないことになってしまうからである<sup>18</sup>。

#### 1.2.4.2 ダルマキールティの議論 (PV II 152-156)

[S 122,26; Ms 53b4]

[応答:] この点にも [ダルマキールティは] 答えている。

《もしも, [体内要素の] 不均衡から生じる苦しみのために, [本来ならばカパから生じる] 欲望が生じないと言うのなら, [実際は] 何によって [欲望が] 生じるのかを答えるがよい。[反論:] [体内要素の] 均衡 (sāmya) から精液 (mada) が増大し, そこから欲望 (smara) が生まれる。》(PV II 152)

《[応答:] 体内要素が不均衡であるにもかかわらず欲望をもつ人が見られるし, [かと思えば, 要素が] 均衡であるのに, 他の者 (= 不浄観を行う者<sup>19</sup>) は [欲望をもつことが見られ] ない。他の者たちは [精液を] 使い果たしても, [なおも欲望があるために] 血 (asrj) を流す。精液は一人の女性のみに定められたものではない。[精液という物質により特定の女性への欲望を説明することはできない。]》(PV II 153)

《それゆえ (= 精液はどの女性に対しても共通しているのだから), ただ一人の [女性] に [欲望が] 激しくなることはないはずである。[だが, それは事実と反する。]「美しい容姿 (rūpa)<sup>20</sup> などまた [欲望の] 原因 (āṅga, = 協働因) である」と言うのなら, それは違う。あらゆる [協働因] は [欲望の発生に対して] 不確定 (anekānta) だからである<sup>21</sup>。また, [欲望の原因が] 不特定 (aniyata) になってしまう。》(PV II 154)

<sup>17</sup> 校訂本は yo 'nyapraibandhena na であるが, 写本に従い yo 'nyapraibandhe na と訂正して読む。ただし, ラヴィグプタの平行箇所 (R D 360a2, P 218a1: gags byed pas mi skye ba gang yin pa) は校訂本の読みを支持する。また, ヤマールは, この箇所について次のような注釈を与える。「anyapratibandhe とは, 『協働因が欠けているために [結果が] 阻害される場合』である」(Y D 184a3-4, P 209a8-b1: **gzhan gyis gags byas na zhes bya ba ni lhan cig byed pa ma tshang bas gags byas na'o** ||)。同じ内容はジャヤンタ (D 318a4, P 371b1) にも説かれる。

<sup>18</sup> すなわち, 「原因 X + 協働因 Y → 結果 Z の生起」という図式を前提とすれば, 「原因 X + 協働因 Y の阻害 → 結果 Z の非生起」となる。上記の例では, X = カパ, Y = 体内要素の均衡, Z = 欲望である。

<sup>19</sup> ジャヤンタ (D 318a6, P 371b4: **gzhan ni mi gtsang [P; tshang D] ba bsgom pa la mngon par dga' ba'o** ||) による。なお, 対応する箇所のヤマール (D 184a6, P 209b3-4) にある sdug pa sgom pa は mi sdug pa sgom pa の誤記であろう。

<sup>20</sup> 前稿 (護山 2021: 64, fn. 75) にて, rūpa の訳語として「美しさ」を選んだが, それが容姿のことに限定されることが明確ではなかった。木村 (1987: 132) は「姿」と訳す。本稿では「美しい容姿」あるいは単に「容姿」と訳す。前稿の訳の訂正については, 本論文末尾を参照されたい。

<sup>21</sup> ヤマール (D 184b3-4, P 209b8-210a1) は次のように注釈する。「anekāntāt とは, 美しい容姿などにも欲望に対する逸脱があるから肯定的随伴関係 (美しい容姿 → 欲望) はなく, 美しい容姿などがなくても, 精液があれば [欲望が] ある [場合がある] のだから, 否定的随伴関係 (美しい容姿の無 → 欲望の無) もない, という意味である。」(ma nges phyir zhes bya ba ni | gzugs la sogs pa la yang 'dod chags la 'khrul pa'i phyir rjes su 'gro ba med la | gzugs la sogs pa med kyang khu ba yod na yod pa'i phyir ldog pa med pa yin no zhes bya ba'i don to ||)。同じ内容はジャヤンタ (D 318b1-2, P 371b7-8) にも説かれる。

《〔精液が欲望の原因であるのなら、相手の〕美点 (guṇa) を把握しない者も〔欲望をもつ者〕になってしまう<sup>22</sup>。もし〔以上の帰結を避けるために、〕そのような美点の把握 (guṇagraha) もまた〔欲望の〕原因であるとすれば、すべての者は〔共通に〕美点を把握する者になるだろう<sup>23</sup>。原因 (= 対象に属する美点の存在) に違いはないからである<sup>24</sup>。》(PV II 155)

《また、ある状態 (= カパをもつ状態) にある者が欲望をもつと認められるならば、そのような者は怒りをもつ者にはならないだろう。その両者 (= 欲望と怒り) は同じ性質ではないからである。また、これ (= 欲望や怒りなど) に関する〔体内要素による〕制約 (niyama) は見られない<sup>25</sup>。》(PV II 156)<sup>26</sup>

#### 1.2.4.3 体内要素を原因とする精液などにより欲望の発生を説明することはできない (PV II 152-154 の注釈)

[S123,5; Ms54a1]

<sup>22</sup> ヤマーリ (D 184b4-5, P 210a2-3) は次のように注釈する。「もし精液が欲望の原因であるのなら、その場合、美德を把握しない者、すなわち、不浄観などにより〔美しいものも〕不浄なものとして把握する者にも欲望があることになってしまう。」(gal te khu ba 'dod chags kyi rgyu yin na [P; no D], de'i tshes yon tan ma bzung ba mi sdug pa bsgom pa la sogs pas mi sdug pa la sogs par 'dzin pa la yang 'dod chags yod par 'gyur ro ||)。ジャヤンタ (D 318b2-3, P 372a1-2) も同様に不浄観を行う者のことだと理解する。

<sup>23</sup> 校訂本は sarvā であるが、写本に従い、sarvo に訂正する。

<sup>24</sup> 理由の文が理解しにくいのが、対論者の立場からは美しい容姿などの美点は主観的なものではなく、客観的に存在するものと考えられているだろう。その場合、対象の側に美点が現存する以上、不浄観の実践者もふくむすべての人は等しくその美点を把握することになり、欲望をいだくことになる、という内容だと思われる。ヤマーリ (D 184b6-7, P210a4-5) は以下のように注釈する。「[すべての者が美点を把握する者になるだろう、というのは] どうしてか、と云えば、hetor と答える。容姿などの美点が単に存在すること [がその原因] である。それゆえ、精液が存在すれば、〔不浄観により〕美点を把握しない〔はずの〕者にも〔欲望が〕あることになろう、ということが定まった。」(ci'i phyir snyam na | rgyu ni zhes gsungs te | gzugs la sogs pa'i yon tan yod pa tsam mo || de'i phyir yon tan 'dzin pa ni rgyu yin no || des na khu ba rgyu yin na yon tan mi 'dzin pa la yang 'gyur ro zhes bya ba'i gnas so ||)。Cf. Franco 2017: 330: “If the apprehension of quality is also a part (in addition to sperm) of the cause of desire, everyone would apprehend the quality (and everyone who apprehends a quality like beauty would have desire), because the cause, such as beauty, is the same.”

<sup>25</sup> 欲望と怒りとは両立しない二つの結果であるから、その原因になる要素もまた本来であれば対立するはずである。ところが実際には、カパをもつ者にも怒りが生じることが観察される。それはつまり、体内要素という原因と欲望などという結果とのあいだに対応関係がないことを意味する。ヤマーリ (D 185a1-2, P 210a7-8) は次のように述べる。「結果 (= 欲望と怒り) と同様に、その二つの根本要素 (= カパとピッタ) も完全に対立する。もし対立しないのであれば、結果もまたそう (= 対立すること) にならないであろう、ということ述べるのが taylor, すなわち、『欲望と怒りは〔同じ性質ではないから〕』である。〔対論者の見解では、〕欲望などはカパなどの根本要素に制約されてはいない。そうであれば、〔欲望と怒りとは〕対立しないことになろう。このことを述べて、niyamaś cātra と云う。」(bras bu bzhin du de'i rang bzhin gnyis kyang 'gal ba kho na ste | mi 'gal na ni 'bras bu yang der mi 'gyur ro zhes brjod pa ni de gnyis zhes bya ba ste, 'dod chags dang zhe sdang gnyis so || gang gis 'gal bar mi 'gyur pa | 'dod chags la sogs pa ni bad kan la sogs pa'i rang bzhin la nges pa yang ma yin no zhes brjod pa ni | 'di la nges pa zhes bya ba'o ||)。

<sup>26</sup> 他の翻訳として木村 (1987: 131-133), Vetter (1990: 59-63), Franco (2017: 330) がある。



もし「カパなどが均衡しているおかげで、〔ピッタと〕対立する病が生じなければ、精液 (mada = śukra) が増大し、そのために、欲望 (smara = rāga) が生じる」<sup>27</sup>とするのなら、その場合、〔君の見解によれば、〕身体的要素が不均衡な者は精液が尽きているのだから、性交時に血を流す者 (surataksataja), すなわち、女性に対して過度に執着し、欲望をもつ者にはなるはずはない。〔しかし、実際はそうではない。また、〕精液はすべての女性に対して共通するのであるから、一人の女性だけに定められた欲望をもつ者にならないはずであろう。それゆえ、同じ精液が存在するのだから、一人の女性に対して欲望が激しくなることはないはずであろう。〔しかし、実際はそうではない。〕<sup>28</sup>

〔反論：〕対象である女性もまた〔欲望の〕原因 (= 協働因) である。また、その〔女性の〕容姿などの卓越性に基ついて〔欲望は〕変わるのだから、容姿などもまた〔欲望の〕原因に他ならない<sup>29</sup>。すなわち、

《〔女性の〕卓越した容姿という罫のために心が統御できなくなった者たちは、自分の妻を捨てて別の女性に欲情する。》(653)

《場合によっては、〔その女性の〕振る舞い (upacāra) が欲望を抱く原因になる<sup>30</sup>。精液が欲望の唯一の原因なのではない。それ (= 振る舞い) に基ついて〔欲望の対象が〕制約されることもある。》(654)

したがって、〔精液という原因に加えて、〕協働因 (sahakārin, 容姿や振る舞いなど) があるのだから、〔特定の〕一人の女性に〔欲望が〕激しくなるのであり、それ以外〔の女性〕に対してはそうではない。それゆえ、過失はない。

〔応答：〕以上のことも正しくない。なぜならば、

《すべての点で逸脱 (vyabhicāra) が見られるので、容姿などは決して〔欲望の〕原因ではない。容姿の点で劣る女性にも欲望が起きるからである。》(655)

《「〔容姿が劣る女性にも<sup>31</sup>〕品のある振る舞いがあるから〔その女性に対する欲望がある〕』』と云うのなら、〔卓越した〕容姿は〔欲望の〕原因ではない。振る舞いの点で劣る女性にも〔相手を欲情させる〕容姿があるから〔その女性に対する〕欲望がある。それゆえ<sup>32</sup>、品のある振る舞いもまた欲望の〔決定的な〕原因として妥当しない。〔容姿と振る舞いの〕両者いずれも持ち合わせていない女性に対しても、時として、欲望〔が起

<sup>27</sup> PV II 152 に登場する mada, smara をそれぞれ śukra, rāga の別名として説明している。

<sup>28</sup> 対論者説：体内要素の均衡→精液の増大→欲望の発生。この説に対して、プラジュニヤーカーラグプタは、PV II 153-154a の内容を整理して、(1)体内要素が不均衡で精液が枯れた者でも欲望を抱くこと、(2)精液が原因であれば、特定の女性に対する欲望とはならないこと、という二点で逸脱があることを指摘する。

<sup>29</sup> この一文は、チベット語訳を参考にしながら理解した。T (D115a5-6, P136b2): gang gi phyir gzugs la sogs pa'i khyad par las khyad du 'gyur ba'i phyir || gzugs la sogs pa yang rgyu nyid do ||。この場合、yatas は直前の文にかかるものと解釈される。

<sup>30</sup> 校訂本は hetunā であるが、写本に従い hetutā と訂正する。

<sup>31</sup> 補いはヤマーリによる。

<sup>32</sup> ヤマーリに従い、tat は tasmāt の意味で読む。

きること〕が経験されるからである。》(656-657)

《〔欲望は〕すべて（＝容姿など）を原因とするのではない。すべての者が同じ欲望をもつことが帰結してしまうからである。》(658ab)<sup>33</sup>

〔反論：〕〔欲望は〕不特定の原因<sup>34</sup>をもつと認められる。

〔応答：〕それも正しくない。また、「〔Xにより〕制約されていないもの（ex. 欲望）がそれ（＝X, すなわち不特定の原因）から生じる」<sup>35</sup>ということは正しくない。

あるいは〔容姿などが欲望の原因だとすれば、〕<sup>36</sup>、〔恋愛対象に〕容姿と美点を望む者の<sup>37</sup>欲望は〔両者を兼ね備えた〕一人の女性に定まるのであり、〔その欲望は、〕不意に現れた美しくない女性への欲望に苛まれている者を行為へと駆り立てることはないはずであろう。〔しかし、それは事実と反する。それゆえ、容姿や美点は欲望の原因ではない。〕

#### 1.2.4.4 美点の把握も欲望の原因ではない（PV II 155 の注釈）

[S123,20; Ms54a5]

さらにまた、精液が欲望の原因であるとするならば、〔相手の〕美点（guṇa）を把握していない者（＝不浄観を行うヨーガ行者）にも欲望が生じることになるだろう。〔しかし、それは事実と反する。〕

〔反論：〕美点を把握することもまた〔欲望の〕原因（āṅga）である。

〔応答：〕その場合、〔ヨーガ行者をふくむ〕すべての者は美点を把握するということが帰結してしまう。すべての〔対象<sup>38</sup>〕には美点の把握の原因（＝美点が単に存在すること<sup>39</sup>）があるからである。

<sup>33</sup> この半偈は PV II 148ab (na sarvadharmāḥ sarveṣāṃ samarāgprasaṅgah) を改作したものである。違いは sarvadharmāḥ → sarvāhetuḥ の部分。なお、この箇所に対するヤマーリ (D 185a5, P 210b3-4) の注釈では、次のように説明される。「〔反論：〕それでは、任意の原因がある。〔応答：〕プラジュニャーカラグプタは sarva と述べる。容姿などは、〔それらが実際に〕存在するままで、〔欲望の〕原因である、ということが否定される、という意味である」(‘o na ci rung ba zhig rgyu yin no snyam na | kun la zhes gsungs so || gzugs la sogs pa ji ltar yod pa rgyu nyid yin par bkag pa yin no zhes bya ba’i don to ||)。同様の説明はジャヤンタ (D 318a2-3, P 372b3) にも見られる。

<sup>34</sup> ここでは、容姿や振る舞いなどの協働因のうちのいずれかが欲望の原因になる場合が想定されている。

<sup>35</sup> すなわち、欲望は必ずしも相手の容姿を原因とするわけではないのだから、それが容姿（欲望に対する不特定の原因）から生じることはない。ヤマーリ (D 185a5-6, P 210b4-5) の注釈は以下の通り。「aniyata とは、任意の〔原因の〕いずれかがなくても、離反しないようなものである。tatas とは、それ (X) がなくても〔欲望〕生じるような、〔不特定の原因〕に基づいて、である。」(nges pa med pa zhes bya ba ni gang rung zhig med par yang mi ldog pa’o || de las zhes bya ba ni gang med kyang ’byung ba las so ||)。

<sup>36</sup> 写本および校訂本は ekasyām であるが、ヤマーリ注 (PVANMs 169r4) に従い、ekasyām vā と訂正して読む。ただし、ヤマーリ注チベット語訳 (D 185a6, P 210b5) には vā に相当する語はない。「制約がある場合の別の過失を述べて、ekasyām と述べる。容姿と美点を具えた〔女性〕に対して、〔という意味〕である」(nges ba la [P; las D] ni nyes pa gzhan yang brjod pa ni ’dod chags geig la zhes bya ba ste | gzugs dang yon tan dang ldan pa la’o ||)。

<sup>37</sup> 写本および校訂本は rūpagrahanalālasasya であるが、チベット語訳 (gzugs dang yon tan ’dod pas D 115b3, P 136b8) に従い、rūpaṅalālasasyā- と訂正して読む。

〔反論：〕〔対象に〕美点があるというだけで美点を把握するわけではない。

〔応答：〕それならば何に基づいて美点を把握するのか。もし美点の把握は対象なしで生じると言うのであれば、〔その場合<sup>40</sup>、それは〕無始爾来の潜在印象 (anādivāsanā) に基づくものだから、「欲望などは〔過去の〕反復経験 (abhyāsa) に基づく」〔という我々の主張<sup>41</sup>〕に帰結する。

#### 1.2.4.5 欲望と怒りとは両立しない以上、ピッタとカパも両立しない (PV II 156 の注釈)

[S123,23; Ms54a6]

さらにまた、ある〔身体〕状態にある人に欲望があるのなら、その〔同じ身体〕状態にある人に怒りがあるはずがない。欲望と怒りとは同じではないのだから、〔相互に〕対立する根本要素 (prakṛti) を有しているからである。そして、〔唯物論者の見解では、〕それ (= 怒りの原因であるピッタ) と対立する根本要素 (= カパ) に立脚する者にそれ (= 怒り<sup>42</sup>) は生じない〔はずだろう〕。

〔反論：〕確かに生じない。

〔応答：〕それも合理的ではない。《また、これ (= 欲望や怒りなど) に関する〔体内要素による〕制約は見られない》(PV II 156d) 〔と言われた通りである。〕

あるいは〔別解釈として〕、もし〔欲望と怒りの〕両者ともに同じ〔一つの〕根本要素があるとすれば、両者は〔実は〕同一であるということが帰結する。

〔反論：〕その通りである。

〔応答：〕そうではない。そのような制約 (= 同一の根本要素から欲望と怒りが等しく生じるという制約) は見られないからである。というのも、これ (= 欲望と怒り) に関して〔両者が〕同時にあるという制約は見られないからである。

〔反論：〕ピッタという根本要素の状態にある者には一時的な発汗などがあるが、いつもそうなるわけではない。欲望などもそれと同じことである。

〔応答：〕それは違う。

《〔ピッタという体内要素をもつ人の場合、〕汗は火<sup>43</sup>との結合〔という別の原因〕から生じる。それ (= 火との結合<sup>44</sup>) がなければ、それ (= 汗<sup>45</sup>) は生じるはずがない。》(658cd)

《一方、〔対論者の見解では、〕欲望などに関して、〔相手の〕容姿などの原因とは別のそれ (= 原因) はない。それ (= 容姿など<sup>46</sup>) があるのならば、〔それだけで〕原因が完

<sup>38</sup> ヤマーリ (D 185a6, P 210b6) は「人間」(skyes bu) と解するが、これは欲望の対象となる人間のことを指すであろう。

<sup>39</sup> ヤマーリ (D 185a6-7, P 210b6) による。

<sup>40</sup> ヤマーリ (D 185a7, P 210b6) による。

<sup>41</sup> Cf. PV II 146d-147a.

<sup>42</sup> ヤマーリ (D 185a7, P 210b6-7) による。

<sup>43</sup> ジャヤンタ (D 319a4, P 372b5-6) は「外〔界〕の火」(phyi [P; phyir D] rol gyi me) と注釈する。

<sup>44</sup> ヤマーリ (D 185b1, P 210b8) による。

<sup>45</sup> ヤマーリ (D 185b1, P 210b8) による。

全になるので、欲望などが無いはずはない。〔しかし、実際には、容姿などだけを原因として欲望が生じるわけではない。〕》(659)

### 1.2.5 欲望などの発生原因は潜在印象である (PV II 157 の注釈)

[S123,31; Ms54b1]

〔反論：〕〔相手の容姿などという外的な補助とは別の〕内的な補助によりもたされた潜在印象との結びつきがあるから、〔体内要素による〕制約とは逆のこと (ex. ピッタがあっても欲望がある<sup>47)</sup>) が起きる。

〔応答：〕 その場合、潜在印象こそが欲望などの原因である。欲望に関して、〔その発生を〕補助する〔同類の欲望の〕反復経験 (bhāvanā) があるからである。

〔反論：〕「潜在印象の区別に応じて欲望などが生じる」と〔説く〕者 (= 仏教徒) にも、この同じ過失 (= 容姿などによる因果関係の逸脱) がどうしてないことがあるか。

〔応答：〕 以上の反論があるかもしれないが、それに対して〔ダルマキールティは〕こう答えた。

《「欲望などは〔先行する〕同類の潜在印象の区別に束縛されて起きるものである」と〔説く〕者 (= 仏教徒) には〔対論者に向けられた〕上記の諸過失は付随しない。》(PV II 157)<sup>48</sup>

というのも、欲望などが潜在印象から生じるのであれば、その場合、ある者に、ある〔対象〕に関して〔過去の〕別の生存で結びついた潜在印象があれば、その者には、同じその〔対象〕に関する覚知が特定の仕方、特定の時に、特定の原因により生じるからである<sup>49</sup>。〔このように〕欲望などが潜在印象により制約される場合<sup>50</sup>、容姿などに依拠することはないのだから、先に〔対論者に向けられた〕諸過失が生じる余地はない。

<sup>46</sup> ヤマーリ (D 185b2, P 211a1) による。

<sup>47</sup> ヤマーリ (D 185b3, P 211a2) は、「同時性という制約」(dus mtshungs pa nyid du nges pa) と解釈するが、それには従わない。

<sup>48</sup> 他の翻訳として木村 (1987: 133), Vetter (1990: 64), Franco (2017: 331) がある。

<sup>49</sup> ヤマーリ (D 185a5-6, P 211a5-6) はこの箇所を次のように注釈する。「kadācit とは、青年になるなどの特定の時に、である。kathañcit とは〔欲望の〕少・中・〔大〕などの〔程度の〕違いにより、である。kenacid dhetunā とは、容姿などの外的な〔要因〕により、あるいは、内的な〔要因〕、すなわち、特別に特徴づけられていない心などにより、である」(‘ga’ zhiḡ gi tshes zhes bya ba ni lang tsho la bab pa la sogs pa’i dus nges par ro || rnam pa ‘ga’ zhiḡ ltar zhes bya ba ni | chung ngu dang ‘bring po la sogs pa’i dbye bas so || rgyu ‘ga’ zhiḡ gis zhes bya ba ni | gzugs la sogs pa phyi rol gyis sam | nang gi khyad par nye bar mtshon par bya ba ma yin pa sems pa la sogs pas so ||)。ジャヤンタ (D 319a7-b1, P 373a2-3) にも同様の説明が見られる。

<sup>50</sup> vāsanāniyame に関して、チベット語訳 (D 116a5, P 137b4: bag chags ma nges pa na) は vāsanā-niyame と読むが、それには従わない。ただし、チベット語訳の通りに「〔そもそも〕欲望などが潜在印象により制約されていなければ、〔欲望の発生が〕容姿などに依拠すること〔も〕ないのだから」と読んでも、意味は通じる。

### 1.3 唯物論者との対論

#### 1.3.1 欲望などは四元素の属性であるという学説の否定

##### 1.3.1.1 導入

[S124,7; Ms54b3]

〔反論：〕欲望などは風質などの属性であるはずはない<sup>51</sup>。〔欲望などは〕元素の属性であろう。

〔応答：〕〔ダルマキールティは〕こう答えた。

《以上により、〔欲望などが〕元素の属性 (bhūta-dharma) であることも否定された。また、〔先に第 63 偈以降で〕依存関係 (niśraya) が否定されているのだから、白などは地〔元素〕に依存しているわけではない。〔それゆえ、欲望も元素に依拠しているわけではない。〕》(PV II 158)<sup>52</sup>

ある者 (=唯物論者)<sup>53</sup> が「それら (=欲望など) は地などの諸元素の属性である。すなわち、地〔元素〕と水〔元素〕を大部分として持つならば、欲望が生まれ、火〔元素〕と風〔元素〕からは怒りが、水〔元素〕と風〔元素〕から愚かさが生じる」と述べたことも否定された。〔上記の組合せの〕いずれの場合でも、〔欲望などが特定の元素から生じることは〕不確定であるから。また同様に、《また、ある状態にある者が欲望をもつと認められるならば》(PV II 156) 云々と先述したばかりである<sup>54</sup>。

<sup>51</sup> ヤマーリ (D 185a6-7, P 211a6-7) はこの反論を次のように紹介する。「以上のように、カパヤヴァータなどという〔四〕元素の変容が欲望などの原因である〔という反論を〕否定してから、『〔欲望などは〕対論者 (=唯物論者) が承認している元素に他ならない』という〔反論を〕退けるために、mā bhūvan と述べる」(de ltar bad kan dang rlung la sogs pa 'byung ba yongs su gyur pa 'dod chags la sogs ba 'i rgyu yin pa bsal nas gzhan gyis khas blang ba 'i 'byung ba nyid yin pa bzlog pa 'i phyir gal te zhes smos so ||)。Cf. J D 319b2-3, P 373a5-6. 以下、欲望などは地・水・火・風の四元素に基づくとする唯物論者 (Cārvāka/Lokāyata) の見解が検討される。稲見 (1986: 5) が指摘する通り、PV II 34ff. における唯物論批判の箇所が登場する対論者について、諸注釈は①心は身体の結果である (ex. ランプと光)、②心は身体の属性である (ex. 布と白さ)、③心は身体的能力である (ex. 酒と酔わせる能力) という三説を提示する。今、PV II 158ff. の文脈においては、vv. 158-159 において②に関連する見解が否定され、vv. 160ff. において③に関連する見解が否定される。

<sup>52</sup> 他の翻訳として木村 (1987: 134)、Vetter (1990: 65)、Franco (2017: 331) がある。

<sup>53</sup> ヤマーリ (D 185b7-186a1, P 373a5-6) は次のように述べる。「このことは、『知は身体に依拠するのだから、〔慈悲が〕反復経験 (abhyāsa) により成立することはない』(PV II 34b-c) 云々ですすでに否定されたことではあるが、なお誤解がある可能性があるので、〔再度、〕否定する。〔実際、〕次の誤解も見られる、と述べて、ya āha と言う」(‘di ni blo lus la ni brten pa ‘i phyir [P; phyir ro D] || goms pas grub pa med ce na zhes bya ba la sogs pas bkag zin kyang log par rtog pa srid pas yang ‘gog pa yin no || log par rtog pa de yang mthong ngo zhes bshad pa ni | ‘di dag ni zhes bya ba ‘o ||)。Cf. J D 319b3-4, P 373a6-7.

<sup>54</sup> 三種の体内要素により欲望などの発生を説明する対論者を論駁したのと同じ方法で、唯物論者の見解も論駁される。すなわち、地・水→欲望、火・風→怒り、水・風→愚かさ、という対応関係から逸脱する事例 (ex. 風元素をもつのに欲望がある場合など) があるはずであり、また、地・水の状態にあれば欲望をもつと認められ、怒りはないはずなのに、実際には怒りが見られる場合もあろう。

### 1.3.1.2 依存関係の否定

#### 1.3.1.2.1 元素と白さとの依存関係の否定

[S124,12; Ms54b5]

また、依存関係 (āśrayāśrayibhāva) は、《存在者も非存在者も〔何かに〕依存することはないから》(PV II 63a)<sup>55</sup> 云々とすでに否定されている。

〔反論：〕ちょうど白など〔の色〕が粗大元素 (mahābhūta) に依拠するように、欲望なども同様に〔粗大元素に依拠する〕。

〔応答：〕それに答えて《白などは地〔元素〕に依存しているわけではない》と言う。もし〔白などが〕地〔元素〕などに依拠するのであれば、諸元素と色などは別であると認めることになり、〔一切は〕単に元素のみ (bhūtamātra) とする〔対論者自身の〕承認を否定することになる。というのも、〔一切は〕単に元素のみであると承認するのであれば、〔色と元素との〕依存関係は〔最初から〕ないからである。

もし認識〔という精神的なもの〕が元素〔という物質的なもの〕に依拠するのであれば、〔様々な精神的な要素を含めて、〕多数の真実在 (tattva) があることが帰結してしまう。〔それは、四元素のみを真実在とする唯物論者の見解に反する。一方、〔認識と元素とは〕無区別であるとするのならば、諸元素は単一のもの (= 認識それ自体) となるだろう。〔諸元素は〕認識と区別されないのであるから。〕

#### 1.3.1.2.2 「素材とする」(upādāya) の語義解釈

[S124,17; Ms54b6]

〔反論：〕「諸元素を素材として (upādāya) 色などがある」<sup>56</sup> と〔仏教徒は〕承認している以上、〔色が元素に〕依拠すること (āśraya)<sup>57</sup> を否定したと矛盾する<sup>58</sup>。

〔応答：〕そうではない<sup>59</sup>。「～を素材として」は「～に依拠して」を意味するのではなく、「～を原因として」を意味する。〔ダルマキールティは〕そのことを次のように述べた。

《また、「それ (= 元素) を素材として」という〔ブッダの〕言葉は、〔「元素を〕原因と

<sup>55</sup> 知が身体を拠る所とすることはないことを述べた詩節である。Cf. Vetter 1990: 65, fn. 2. 詳細は Franco 2021: 296-298 を参照。

<sup>56</sup> 「色など」が意味するものは、『俱舍論』(AK I 35a-c, AKBh 23, 18-24,13, cf. 櫻部 1969: 202-204) に説かれる大種所造 (bhautika) を指すだろう。すなわち、五つの感覚器官および色・声・香・味の四つの対象、接触対象 (触) の一部、そして法界の一部である無表 (avijñapti) がそれである。この典拠とされる経典では、「粗大な諸元素 (大種) を素材として」(mahābhūtāny upādāya) の表現が繰り返される。同様の表現 (catunnañ ca mahābhūtānam upādāya) はパーリ語聖典にも多く登場する。Cf. Vetter 1990: 66, fn. 1 は Majjhima Nikāy, PTS I, p. 53,12 を一例として挙げる。

<sup>57</sup> ここでの āśraya は「拠る所」ではなく、「依拠すること」として理解する。Cf. Franco 2021: 296. 対応するチベット語訳 (D 116b4, P 138a3: rten dang brten pa'i dngos po) からは āśrayāśrayibhāva が想定されるが、その訂正は行わない。

<sup>58</sup> すなわち、仏教徒は自らの承認内容と矛盾したこと (khas blangs pa dang 'gal ba) を述べたことになる。Cf. J D P 319b5, 373b1.

<sup>59</sup> チベット語訳 (D 116b4, P 138a3: ma yin te) から na を補う。

して」を意味する。また、〔Xが〕自らの拠り所 (āśraya, =Y) と不可分 (avinirbhāga) に存立しているから<sup>60</sup>, 〔YがXの〕「拠り所」とされる。それ以外の仕方では、〔「拠り所」と言われるのは〕妥当しない。》(PV II 159)<sup>61</sup>

「～を素材として」の意味は「～に依拠して」の意味ではなく、「～を原因として」の意味である。すなわち、

《原因は結果と同時であるとは認められない。同時にある二つのもののあいだに因果関係などは確定されない。》(v. 660)

それゆえに、〔同時にある二つのもののあいだに〕依存関係はない<sup>62</sup>。

あるいは、他ならぬ同時にある二つのもののあいだに依存関係あるいは因果関係があるとしてもよいが、その場合も、〔ダルマキールティが述べた通り、〕《〔Xが〕自らの拠り所 (Y) と不可分に存立しているから、〔YがXの〕「拠り所」とされる。》(PV II 159b-c) すなわち、

《色などには〔元素との〕依存関係としての制約があるとすれば、それら (=色など<sup>63</sup>) には〔元素と〕不可分に存立することがあると把握されるべきである。》(v. 661)

もし両者 (=色などと元素) に依存関係 (ādharādheyabhāva) があるとすれば、その場合、依拠する〔属性〕が無くなれば、その基体〔も〕消滅する<sup>64</sup>。あるいは〔属性が消えても基体は〕消滅しないとすれば、後の時点 (=基体だけが独存する場合) と同様に、前の時点 (=属性を保持する場合とが共存する場合) でも〔それは〕基体ではなかったということに

<sup>60</sup> avinirbhāga- (Tib. dbyer med par) の訳語として、「不可分に」をあてる。木村 (1987: 134-135) は「密接に」と訳すが、解説の箇所では「色等が地等に依って生ずるというのは、従って厳密には、所依たる個物と不可分に存在するから、仮に地等を所依と言ったに過ぎないと見る」(下線は筆者による) と述べる。Vetter (1990: 66) は “... insofern [eine Sache] nie ohne das vorkommt, was [als] ihre Stütze [bezeichnet wird und eigentlich ihre Ursache ist]” (ある事物 (X) は、自らの「拠り所」と言われるもの (Y), 実際はその [Xの] 原因であるところのもの (Y) を抜きにしては決して存在しない以上、...) と訳す。これに対して、Franco (2017: 331, fn.3) は次のように注記する。“Vetter 1990, p. 66 seems to take *avinirbhāga* as equivalent to *avinābhāva*; it seems to me that there is an additional implication of inseparability, cf. Edgerton BHSD, s.v.: non-differentiation, non-distinction, confusion.” なお、ジャヤンタ (D 319b6, P 373b3) とヤマーリ (D 186b2, P 212a2) は「共存」(lhan cig gnas pa/lhan cig 'byung ba) と注釈する。

<sup>61</sup> 他の翻訳として木村 (1987: 134-135), Vetter (1990: 66), Franco (2017: 331) がある。

<sup>62</sup> 校訂本は vādharādheyabhāvaḥ であるが、写本に従い、nādhārādheyabhāvaḥ と訂正して読む。

<sup>63</sup> ヤマーリ (D 186b5, P 212a6) による。

<sup>64</sup> 対論者の考えでは、属性 (ādheya) が消滅しても、拠り所 (ādharma) は存続する。つまり、実体が不変の基体となり、そのうえで様々な属性が生じては滅する。これに対して、ダルマキールティ／プラジュニャーカラグプタの考えでは、属性が消えれば、その基体も消える。これが両者の不可分存立性 (avinirbhāgavartiva) であり、彼らが仮に認める「依存関係」の正体である。輪廻の論証における身心関係については、護山 2012: 243f. を参照。

なる。それゆえに、〔色などだけではなく、〕欲望などもまた〔元素と〕不可分に存立する〔という意味での依存関係がある〕、ということが帰結する。だが<sup>65</sup>（ca）、〔実際には、〕色などは別に粗大元素の本性というものがあるわけではないのだから、以上のこと（＝色などが元素に依拠すること）は、ただ対論者説を暫定的に認めて述べたにすぎない<sup>65</sup>。そして、欲望などは〔元素から成る身体と〕不可分に存立することはない。〔欲望などは、元素＝身体がある限りいつも生じるのではなく、〕特定の者に、特定の時に生じるものだからである。

（次号に続く）

---

<sup>65</sup> すなわち、色などと地元素などの粗大元素は本来は別のものではないのだが、両者を別物とする対論者説を暫定承認したうえで、両者に不可分存立の関係があれば、「依存関係」と言うことができる。これがダルマキールティの側の主張である。なお、ここでの「対論者」について、ヤマーリ（D 187a3-4, P212b5）は「唯物論者か一部の仏教徒」（tshu rol mdzes pa'am | sangs rgyas pa'i phyogs gcig）と注記する。



Appendix A: A List of Corrections of R. Sāṅkrtyāyana's Edition of PVA 122,4-124,30

S	Correction
122,6: varttamāne	vardhamāne Ms
122,10: viśeṣasyabhāvād	viśeṣasyābhāvād Ms (cf. khyad par med pa'i phyir ro T [D 114a7, P 135b2])
122,14: nanu viśeṣād	nanv aviśeṣād Ms (cf. gal te khyad par med pa'i phyir T [D 114b1, P 135b4])
122,14: taddu kha-	tadduḥkha- Ms
122,21: br̥ddhir br̥ddhyadravyopayoge	v̥r̥ddhir v̥r̥ṣyadravyopayoge Ms (cf. zas bzhun po zos na T D 114b5, P 135b8)
122,24: tāvatā hetur	Corr. tāvatāhetur (cf. rgyu ma yin pa ni T [D 114b6-7, P 136a2])
122,25: 'nyapraibandhena na	'nyapraibandhe na
122,31: aṅgarūpādy	aṅgaṃ rūpādy Ms
123,4: sarvā	sarvo Ms
123,9: striyaḥ	striyāḥ Ms
123,9: -viśeṣāviśeṣo	-viśeṣāc ca viśeṣo Ms
123,12: hetunā	hetutā Ms
123,18: ekasyāṃ Ms, S	Corr. ekasyāṃ vā (cf. PVAN <sub>Ms</sub> 169r4)
123,19: rūpagrahaṇalālasasya Ms, S	Corr. rūpaṅgalālasasyā- (cf. gzugs dang yon tan 'dod pas T [D115b3, P 136b8])
123,21: guṇahetor Ms, S	Corr. guṇagrahaṇahetor (yon tan 'dzin pa'i rgyu T D 115b4, P137a1-2)
123,27: na (/) etanniyamasyā-	Corr. naitat, niyamasyā- (cf. de ni ma yin te   nges pa T [D 115b7, P 137a5])
124,1: svajāti-	sajāti- Ms
124,4: rūpādīnām	{rūpā}<rāgā>dīnām Ms (cf. 'dod chags la sogs pa mams kyi T D116a5, P 137b3-4)
124,11: abbāyvor	ap{u}vāyvor Ms
124,11: sarvatrānaikāntāt	sarvatrānekāntāt Ms
124,14: -niśritāḥ S, Ms	Corr. niśritā
124,15: -ābhyupagame S (cf. -ābhyupagame / Ms)	Corr. -ābhyupagama
124,17: nāśrayārtha S, Ms	Corr. na (cf. ma yin te T D116b4, P 138a3), nāśrayārtha
124,23: tato vā-	tato nā- Ms (cf. des na ... ma yin no T [D 116b6, P 138a6])
124,29: -ābhyupagamenaiḥ idam S, Ms	Corr.; -ābhyupagamenaiḥ idam

## Appendix B: Synopsis of PVA 118.23-124,30 (ad PV II 146a2-159)

前稿（護山 2021）の箇所もふくめ、本稿で訳出した部分までの科文を以下に提示する。サーンクリティヤーヤナ校訂本（S）の頁行を括弧内で示す。

## 0. 導入：救済者性の第二解釈 [S118,23]

## 1. 苦諦の解説 [S118,29]

## 1.1 苦諦のテーゼ (PV II 146cd-147ab) [S118,23]

## 1.1.1 苦諦のテーゼの提示 [S118,29]

1.1.2 《輪廻する以上、〔五〕蘊は苦である。繰り返し経験されることで欲望などが強烈になることが見られるから》の解説 [S119,6]

1.1.3 《〔欲望などが生じるのは〕偶然的にはない。無因のものが生じることは矛盾するからである》の解説 [S119,29]

## 1.1.4 《輪廻する以上、〔五〕蘊は苦である》の別解釈 [S120,17]

## 1.2 欲望などはヴァータなどの三要素から生じるという学説の否定 [S120,22]

1.2.1 三要素と心理的過失との対応関係には逸脱があり、また、三要素の複合も原因にはならない (PV II 147cd-148ab) [S120,22]

## 1.2.2 欲望などはすべての根本要素の属性であるとする場合の過失 [S121,6]

1.2.2.1 特定の根本要素が優勢であるとしても他の根本要素も能力を有する以上、すべての衆生が等しく同じ欲望などを有することになる (PV II 148cd の解説) [S121,6]

## 1.2.2.2 特別な変容 (pariṇativīṣeṣa) をめぐる議論 [S121,16]

1.2.2.3 業による統御を認める仏教徒には同様の論難は当てはまらない (PV II 149 の解説) [S122,1]

(ここまでが護山 2021 で訳出した部分。なお、1.2.2.3 の項目名は変更している。)

## 1.2.3 要素の変化に応じて欲望などが変化するわけではない [S122,4]

## 1.2.3.1 ダルマキールティの議論 (PV II 150-151) [S122,4]

1.2.3.2 欲望などは要素の変化に応じて変化するわけではない (PV II 150 の解説) [S122,8]

1.2.3.3 欲望などは潜在印象に基づいて楽などから生じる (PV II 151 の註釈) [S122,18]

## 1.2.4 欲望の発生に関する生理学的説明に対する批判 [S122,24]

## 1.2.4.1 導入 [S122,24]

## 1.2.4.2 ダルマキールティの議論 (PV II 152-156) [S122,26]

1.2.4.3 体内要素を原因とする精液などにより欲望の発生を説明することはできない (PV II 152-154 の注釈) [S123,5]

1.2.4.4 美点の把握も欲望の原因ではない (PV II 155 の注釈) [S123,20]

1.2.4.5 欲望と怒りとは両立しない以上、ピッタとカパも両立しない (PV II 156 の注釈) [S123,23]

## 1.2.5 欲望などの発生原因は潜在印象である (PV II 157 の注釈) [S123,31]

1.3 唯物論者との対論 [S124,7]

1.3.1 欲望などは四元素の属性であるという学説の否定 [S124,7]

1.3.1.1 導入 [S124,7]

1.3.1.2 依存関係の否定 [S124,12]

1.3.1.2.1 元素と白さとの依存関係の否定 [S124,12]

1.3.1.2.2 「素材とする」(upādāya)の語義解釈 [S124,17]

参考文献 (追加)

- |             |  |
|-------------|--|
| CS          | Carakasamhitā: Vaidya Jādavaji Trikamji Ācārya (ed.), <i>The Carakasamhitā of Agniveśa</i> . 1981, Bobay: Nirnaya Sāgar Press.                       |
| Franco 2021 | Eli Franco, <i>Dharmakīrti on Compassion and Rebirth: With a Study of Backward Causation in Buddhism</i> . New Delhi: Dev Publishers & Distributors. |
| 稲見 1986     | 稲見正浩「ダルマキールティによる輪廻の論証(上)」『南都仏教』56: 1-23.   |
| 護山 2012     | 護山真也「全知者証明・輪廻の証明」『シリーズ大乘仏教9 認識論と論理学』春秋社, 227-257.  |
| 護山 2021     | 護山真也「プラジュニャーカラグプタの苦諦論(1) — <i>Pramāṇavārttikāṅkāra ad Pramāṇavārttika</i> II 146cd-149 和訳研究 —」『信州大学人文科学論集』9(1): 47-72.                               |
| 櫻部 1969     | 櫻部建『俱舍論の研究 界・根品』法蔵館.   |
| 矢野 1988     | 矢野道雄『インド医学概論チャラカ・サンヒター』朝日出版社.  |

<護山 2021 の訂正表>

\* 前稿のうち, PVA 121,27-122,1 の箇所に関して, テキスト校訂のミスとそれに伴う翻訳のミスがありましたので, お詫びして, 以下のように訂正いたします。

p. 65, l. 9:

<誤>

もし不可見の〔原因〕に関しても, 単に結果を見ることに基づいて, いかなる場合もその特殊性が〔真の原因として〕想定されるのであれば,

<正>

その特殊性は不可見であるとしても, 単に結果を見ることに基づいて, それはいつでも〔真の原因として〕想定されるのだとすれば,

p. 65, ll. 19-21:

<誤>

〔反論:〕美しさ (rūpa) などは〔四〕元素を原因とすると認められる。さらにまた, 〔美しさなどは〕元素の違い (viśeṣa) に応じて区別される。〔それと同じように, 欲望などもヴァータなどの違

いに応じて区別される。]

<正>

[反論:] 美しい容姿 (rūpa) などは〔四〕元素を原因とすると認められる。また一方、元素に違いはないのに〔美しい容姿などは〕区別される。〔特殊な変容を想定しなければ、このような矛盾が生じる。]

p. 69, l. 26

<誤>

121,27: ca	{ca} <sa> Ms
------------	--------------

<正>

121,27: ca	Corr. saḥ (cf. {ca} <sa> Ms)
121,28: yady adṛṣṭer api	yady adṛṣṭo 'pi Ms

p. 69, ll. 29-31

<誤>

122,1: bhūtaviśeṣe S, Ms	Corr. bhūtaviśeṣeṇa (cf. 'byung ba'i khyad par gyis R D359a6); 'byung bar khyad par med par T (D114a4, P135a6), n.e. R P217a2
--------------------------	---

<正>

122,1: bhūtaviśeṣe S	bhūtāviśeṣe Ms (cf. 'byung bar khyad par med par T [D114a4, P135a6])
----------------------	--

(2022年4月30日受理, 5月11日掲載承認)